

燻り続けるブルガリア語・マケドニア語問題は解決するか：最近の論争とその背景
野町素己

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)¹

2020年10月11日のJIJI.COMに「マケドニア語はブルガリア語か 論争、11月に決着？」という記事が掲載された²。この記事では「ソフィアAFP時事」をソースとして、昨今の北マケドニアのEU加盟交渉に関連し、EU加盟国のブルガリアが、北マケドニアとの言語問題の解決こそが北マケドニアを新加盟国と認める条件であると主張していることが紹介されている。この問題の歴史は長く、両国はこれまで何度も鋭く対立してきた。したがって、もしこれが解決するとしたら確かに画期的なことであろうが、にわかには解決するようには思われない。

この問題自体は有名ではあり、専門家以外にも知られている。しかし、歴史的な文脈と関係資料を踏まえて、実証的に全体像を把握するのは容易ではなく、ともすれば主観的な感情論にも陥りかねない。以下では、昨今のマケドニア語を巡る言語問題の議論について、現地の刊行物や研究者の見解を踏まえ、現在の論争、問題の歴史的過程と背景、最後に社会言語学的な観点からこの問題を補足的に捉えてみたい。

1. はじめに：マケドニアのEU加盟交渉とその障害

2019年にマケドニア共和国(マケドニア旧ユーゴスラビア共和国)が北マケドニア共和国に改称したことは記憶に新しい。この改称は「マケドニア」の呼称を巡るギリシャとの対立が原因で、主にマケドニアが旧ユーゴスラビアから独立して以来大きな問題として現れ、特にマケドニアのNATO(1999年申請)やEU加盟(2004年申請)などに関わる様々な政治的な障害となってきた³。それが大きく動いたのが2018年6月12日である。国連の支援のもと、両国国境地域のプレспа湖畔で行われたギリシャとの交渉・合意(プレспа合意)により、マケドニアは「北マケドニア」と国名を変更することになった。これによって、30年近くに及んだ両国の大きな障害に終止符が打たれた。マケドニアでは2019年1月11日に国名変更に関する憲法改正が承認され、その1か月後の2月12日に発効し、一応決着した⁴。なお、言語名称に関して、正式名称は「マケ

¹ 山崎信一(東京大学)、青島陽子(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)両氏が本稿の初校を読み、助言を下された。この場をお借りしてお礼申し上げます。本稿における誤りは筆者に属するものである。また、本稿は筆者個人の考えによるものであり、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのいかなる見解を代表するものではない。

²

https://www.jiji.com/jc/article?k=2020101000516&g=int&utm_source=yahoo&utm_medium=referral&utm_campaign=link_back_auto

³ 2020年3月27日に北マケドニアはNATOに正式メンバーとして加入した。

⁴ 2018年5月に筆者はマケドニア科学芸術アカデミーの国際会議に参加したが、その時にもこの話題で持ちきりであった。当時、学士院準会員のマリヤン・マルコビッチ氏は「国名は『上マケドニア』、言語名は『上マケドニア語』となる可能性がある」と言っていたが、これはギリシャ史の中で実際にある概念だ

ドニア語」を維持することでギリシャ側と合意したため変更はなかった⁵。また、この一連の流れをうけたマケドニア言語法にも特に変更は無い⁶。

国名変更でギリシャとの対立が回避されたことも手伝い、2019年5月29日、欧州委員会は欧州理事会に北マケドニアとアルバニアのEU加盟に向けた交渉開始を勧告したが、同年10月の欧州理事会において北マケドニアとアルバニアとの交渉はフランス、デンマーク、オランダの反対によって保留となった。とはいえ、2019年12月に欧州委員会新委員長に就任したウルズラ・ゲルトルト・フォン・デア・ライエン氏の積極的な働きかけがあり、2020年3月末、欧州理事会は両国との加盟交渉の開始を承認し、4月26日に交渉開始されることになった。

ここで現れたのがマケドニアの言語名を巡る問題である。2006年以来与党であり、民族主義的な政策を取っていた右翼政権の内部マケドニア革命組織・マケドニア国家統一民主党が⁷、2016年の国会議員選挙の結果、中道左派のマケドニア社会民主同盟を中心とした連合に政権を渡した翌2017年8月、マケドニアとブルガリア両国首脳が「ブルガリア共和国及びマケドニア共和国の友好、共存、協同に関する条約」に署名し、両国の専門家が参画する歴史問題に関する委員会も立ち上がり、マケドニアのEU加盟が前進する状況は整いつつあるように見えていた。

しかし、2019年10月9日、ブルガリア閣僚理事会は、北マケドニアのEU加盟交渉に関連し、言語名として「北マケドニア共和国公式言語」という表現の使用を義務付け、やむを得ない場合にのみ、アスタリスク付きで「*マケドニア語(*北マケドニア共和国の憲法に基づく)」とすべきという「メモランダム」をまとめ⁸、2020年3月25日、これをブルガリアの公式見解として欧州理事会に伝えた⁹。この流れで、同年5月7日、以下

が、現在の北マケドニアとは一致しないため、正式な候補になったかどうかは不明である。

⁵ 2018年6月17日に署名されたギリシャとマケドニアの合意書の第1部第1条第2項第3号c)による。<http://morm.gov.mk/wp-content/uploads/2018/08/spogodba-en.pdf>(2020年10月13日閲覧)

⁶ なお同年1月15日、スコピエ大学教授のリュドミル・スパソフ氏を長とする政府機関付属のマケドニア語評議会は言語法改正の提案に関わる会合を開き、海外教育機関でのマケドニア語講座の開設、マケドニア語使用に関わるチェックを行う機関の設立、マケドニア語教育の拡充などが議論された。詳細は次を参照されたい <https://vlada.mk/node/19348?ln=mk>(2020年10月13日閲覧)。また、マケドニア科学芸術アカデミーは、3月12日に「マケドニア語に関する憲章」を発表し、その歴史的正当性および独自性、文章語としての多機能性、国際社会での認知などを述べ、アカデミーは、マケドニア語に関わる研究の優先性と推進、言語の法的な保護への貢献、マケドニア語文学の発展に寄与することなどが宣言されたことは文脈として注目し得る。<http://manu.edu.mk/wp-content/uploads/2019/12/Повелба-за-македонскиот-јазик.pdf>(2020年10月13日閲覧)

⁷ 内部マケドニア革命組織・マケドニア国家統一民主党は、反ギリシャ路線であった。巨大なアレクサンダー大王像をスコピエ中心部に建立、国際空港を「アレクサンダー大王名称スコピエ空港」と改称、スコピエ市内の球技場に「フィリップ2世名称スタジアム」を設立、アレクサンダー大王のモチーフを含むマケドニア独立20周年記念凱旋門の建立など、誇大妄想的ともいえる民族主義的な歴史解釈を公然と行ってきたため、ギリシャから強い反発を招いてきた。

⁸ <https://www.gov.bg/bg/prestentar/novini/ramkova-pozitsia>(2020年10月13日閲覧)

⁹ https://www.parlament.gv.at/PAKT/EU/XXVII/EU/01/66/EU_16606/imfname_10969905.pdf(2020年10月13日閲覧)

(2 節)で概観する『北マケドニア共和国の公式言語』という冊子が刊行された。

マケドニア語の名称と存在は「ピリン・マケドニア人問題¹⁰」や「イリンデン(・プレオブラジェニエ)蜂起¹¹」の位置づけと並んで、両国が意見を異にする問題の一つである。言語問題は主に 19 世紀に端を発するもので、これまで両国は何度も公の場で鋭い対立を見せてきた。後述するが、1978 年のブルガリア語に関する冊子の刊行は、国家と研究機関を巻き込んだ出来事として知られる。そこには「個別のマケドニア語は存在しない。それはあくまでも、マケドニアにおけるブルガリア語の書記・地域的規範形」と書かれているが、それが当時の公式見解であった。今回、同じ見解が新たな文脈で再び表面化し、プロパガンダ冊子刊行という既視感が強い出来事が起きたのである¹²。

上記のブルガリア閣僚理事会による「メモランダム」について、2020 年 9 月 18 日、北マケドニアのゾラン・ザエフ首相は、首都スコピエでの記者会見にて「マケドニア語とマケドニア・アイデンティティは疑う余地のない事実であり、その点において交渉の余地はない」と発表したとされる¹³。それでも自国の EU 加盟への障害を取り除きたい北マケドニア側は、2020 年 10 月 9 日、ブヤル・オスマニ外相が首都ソフィアを訪問し、ボイコ・ボリソフ首相およびエカテリナ・ザハリエフ副首相と会談を行った。ブルガリアのボリソフ首相は、北マケドニアの EU 加盟には、北マケドニア側の妥協が必要という態度を崩さなかったため、言語問題に関しても北マケドニア側に何らかの妥協が促されたと考えられる¹⁴。これに対し、上記のザエフ首相は「ブルガリアからの提案は、ヨーロッパ的でもなければ、友好的なものでもない」と発言したと報じられている¹⁵。また、北マケドニアの前外務大臣で、現ヨーロッパ担当副大臣のニコラ・ディミトロフ氏は、「マケドニア語が、マケドニアのヨーロッパにおける未来と EU への加盟を妨げている問題だとする見方こそが、[訳注:多言語性を謳っているはずのヨーロッパに矛盾するという意味で]非ヨーロッパ的だ。EU がそれをやむなしとするのであれば、EU は「ヨーロッパ」とい

¹⁰ ブルガリア領内におけるマケドニア人マイノリティのこと。現在、ブルガリアはこれを認めていない。

¹¹ 1903 年にマケドニアで起きた反オスマン・トルコの蜂起。マケドニア側はマケドニア人の政治闘争とみなすが、ブルガリア側はこれをトラキア地方で起きたプレオブラジェニエ蜂起と一連のものとし、ブルガリア人の闘争とみなす。併せて、イリンデン蜂起の指導者であったゴツェ・デルチェフ(1872-1903)が、ブルガリア人だったのか、それともマケドニア人だったのかということも議論の対象である。

¹² 『過去と今日におけるブルガリア語の統一性 (Единство на българския език в миналото и днес)』と題されたパンフレットで、1978 年に学士院附属ブルガリア語研究所から刊行された。1980 年には英語版も刊行されている。

¹³ 2020 年 9 月 19 日にブルガリアのニュースポータルサイト『メディアプール (Mediapool.bg)』に掲載された記事による。<https://www.mediapool.bg/zaev-makedonskiyat-ezik-i-makedonskata-identichnost-sa-neosporim-fakt-i-ne-podlezhat-na-pregovori-news312236.html> (2020 年 10 月 20 日閲覧)

¹⁴ 2020 年 10 月 9 日付けのブルガリア語紙『労働新聞 (Труд)』オンライン版による。<https://trud.bg/бойко-борисов-северна-македонија-трябва-да-направи-необходимите-компромиси-за-присъединяван/> (2020 年 10 月 13 日閲覧)

¹⁵ 2020 年 10 月 11 日付けのマケドニア語紙『新マケドニア (Нова Македонија)』オンライン版による。<https://www.novamakedonija.com.mk/featured/zaev-predlozite-od-bugarija-ne-se-nitu/> (2020 年 10 月 13 日閲覧)

う修飾語には値せず、そのような EU を信じていかかわからない」と、EU 側の対応に警戒感をあらわにしている¹⁶。

ボリスフ首相は、両国首脳がソフィアで会談を予定している 2020 年 11 月 10 日まで
に両国の妥協案での合意を望んでいるが、言語問題について、果たしてどのような案
が出されるのか注目される。

以上の文脈を踏まえ、本稿では、これまでの両国の言語問題について、昨今の両
国の主張と反応(2 節および 3 節)、論争の歴史的変遷と背景(4 節および 5 節)、論争
の学術的問題点(6 節)、国際的文脈と展望(7 節)について述べてみたい。

2. 『北マケドニア共和国の公式言語』—ブルガリア側の見解

まず、ブルガリア学士院が刊行した『北マケドニア共和国の公式言語について』を見
てみよう¹⁷。これは約 60 ページの冊子で、発行部数は記されていないが、ブルガリア
学士院のホームページに PDF 版で公開されており、取り下げられない限りは無制限に
アクセス・ダウンロードが可能である。執筆者は 12 人で、多くは学士院附属ブルガリア
語研究所だが、ソフィア大学、ヴェリコ・タルノボ大学、南西大学(ブラゴエフグラド)の
歴史学部の研究者も執筆している¹⁸。その目的は、「北マケドニア共和国の公式言語
は、その発生的および言語の構造的・類型的特点において、ブルガリア語領域の南
西部における書記・地方規範形態」(p.7)を示すことに他ならない。本書で著者たちが
示していることを総合すると、結論は「北マケドニア共和国の公式言語は・・・北マケド
ニア・ブルガリア語と呼ぶことができる」、さらに「その法的地位は、言語変種に対して
与えられるものであり、別個の言語に対して与えられるものではない」(p.55)というこ
とである。以下に、目次の和訳を挙げる。

1. マケドニア地方の歴史・地理に関する簡略な説明
2. マケドニアにおける言語規範史に関する真実
3. マケドニアにおける地名・人名に関する真実
4. スラブ学におけるブルガリアの発見
5. ブルガリア民族復興期におけるマケドニア出身の文人に関する真実
6. 北マケドニア共和国の文章語規範形成に関する真実
7. コソボにおける現代ブルガリア語方言およびアルバニアにおけるマケドニア地方文
章語形式

¹⁶ オンラインポータル a1on.mk による。https://a1on.mk/macedonia/dimitrov-ako-eu-dozvoli-makedonskiot-jazik-da-bide-prechka-na-nashata-evrointegracija-ne-znam-dali-kje-mozheme-da-veruvame-vo-takva-cu/(2020 年 10 月 13 日閲覧)

¹⁷ 原語では За официалния език на Република Северна Македонија.

¹⁸ 次のサイトからダウンロードした。http://www.bas.bg/wp-content/uploads/2020/05/Za-oficialnia-ezik-na-Republika-Severna-Makedonia-Online-Pdf.pdf(2020 年 10 月 13 日閲覧)

8. ブルガリア諸方言の統一性
9. 言語問題に関わる現在のエスニック・人口的指標
10. 現在の相互関係にある北マケドニア共和国の公式言語
11. 結論および学問および文化における相互関係のためのロードマップ

本書ですぐに気づくのは、「真実」(истина)という語が節の題目で高頻度に使われていることである。これに対しては、マケドニア語に関して広く普及している言説があたかも誤りで、それを正そうという見方ができよう。冊子中、大事な主張は太字で強調されているが、それだけをいくつか見ても、決して新しい論拠は出てきていない。以下にいくつか挙げると、例えば、現在のマケドニア語の規範は 1944–1945 年に成立したもので、それ以前のマケドニア語の歴史は存在しないこと(p.12)、マケドニア方言による地名や人名は、ブルガリア語の最も古い要素のそれであり、ブルガリア語の枠を出ないこと(p.19)、19 世紀のスラブ学者であるパヴオル・シャファリクらが「ブルガリア方言はブルアリア、マケドニアで 500 万のスラブ人によって話されている」と述べていたこと(p.21)、ブルガリア民族復興期(18 世紀～19 世紀)に民族言語としてのマケドニア語の形成過程の存在を示す証拠がないこと(p.23)、民族復興期のブルガリ語文法、辞書などには「ブルガリア語」、あるいは「スラブ・ブルガリア語」と書かれており、「マケドニア語」と書かれているものは全くないこと(p.31)、分析的な言語構造を持つのはスラブ諸語の中でもブルガリア語のみであること(p.47)などである。また、一連のブラジェ・コネスキやその追従者の著作は、あくまでブルガリア語の著作から「翻案」であり、「盗用」ですらある(p.36)といった厳しい表現も、これまでと大きく変わらない¹⁹。

なお、ブルガリア・マケドニア両国の公式文書において、1999 年以降「両国の公式言語—ブルガリア共和国の憲法に従いブルガリア語、そしてマケドニア共和国憲法に従いマケドニア語」として署名されている。これについてこの冊子では、ブルガリア側の「北マケドニアの書記形態規範と北マケドニアの憲法に基づく法に対する敬意の現れ」ではあるものの、この事実自体は言語的、学術的な本質ではないゆえ、マケドニア語が「ブルガリア語のブルガリア語領域の南西部における書記・地方規範形態であることは変わらない」と述べられている(p.54)。簡単に言い換えるならば、ブルガリアはマケドニアに対し「マケドニア語を認めたと勘違いするな」と釘を刺していると考えられる。

最後に、ブルガリア側が提案する今後のロードマップ 3 点についても言及する必要がある。

1. 両国は言語的に近いので、双方で文化、メディアの交流を拡大すべきであり、その際に「言語内翻訳」をする必要はないこと

¹⁹ ブラジェ・コネスキ(1921–1993)はマケドニアの言語学者で文学者。スコピエ大学教授およびマケドニア科学・芸術アカデミー正会員。マケドニア語標準語の形成と発達において大きな役割を果たした。

2. 両国においてメディア、学術、啓蒙的学術媒体の自由な交換を行う必要性
3. 学術交流においては、客観的、学術的真実に必ず依拠する必要があること

そして、ブルガリア社会では、ブルガリア語の歴史的事実に矛盾する北マケドニアの公式言語の在り方は肯定的に受け取られず、あくまでもブルガリア語の一形態であることが主張されて冊子は結ばれている。

3. 「マケドニア語の連続性」—マケドニア側の見解

このブルガリア側の「伝統的」な主張に対して、マケドニア科学・芸術アカデミーおよびクルステ・ミシルコフ名称マケドニア語研究所(以後「マケドニア語研究所」といった主要機関は敏感に反応した。最も早い反応は、3日後の5月10日に刊行されたマケドニア語研究所の公式文書「ブルガリア学士院の最新の出版物『北マケドニア共和国の公式言語』に寄せて」である²⁰。この文書では、上記の冊子の流れに沿って、以下の観点から反駁を行っている。

1. マケドニア語の歴史
2. 民族復興期の文人たち
3. マケドニアの地名・人名
4. マケドニア諸方言
5. マケドニア文章語の形成

論点を概観すると、1では、ブルガリアの学者がマケドニアで使用されていると非難する用語「古マケドニア語」および「新マケドニア語」は、実際にはマケドニアでは使用されておらず、これが事実誤認であること、個々の教会スラブ語のテキストのいくつかは、マケドニア地方変種というべき、マケドニア固有の要素を含んでいることが学術的に既に示され、学界で広く認められているということが論じられている。

2では、19世紀のマケドニア地方出身の民族復興期の文人たちは確かに「ブルガリア語」、「ブルガリア人」という用語を使っていたが、民族概念の形成史の観点から、現代の文脈で同じものと捉えるのは誤りであり、「ブルガリア語」が意味していたのは「民族言語」ではなく、「民衆語」程度の意味と考えられること、同じく当時「ブルガリア人」は黒海からアドリア海までの南スラブ人に広く用いられていたことが述べられ、さらに個々の文人についての言語特徴や言語観が概観されている。

3では、マケドニアの地名は「ブルガリア的」というよりは、むしろスラブ的な特徴を持ち、それらはクロアチア、セルビア、スロベニア、チェコ、ポーランドといったスラブ語圏

²⁰ 論文集『マケドニア語への見解 (Поглед за македонскиот јазик)』の付録として、603–611頁に収録されている。

と共通の特徴があることが示されていて、これはブルガリア側の主張とはきわめて異なる点だ。したがって「純粋にブルガリア的」というのは受け入れられないこと、また「-ov や -ev で終わる苗字がブルガリア語固有のものであり、-ski で終わる苗字はブルガリア語と区別するための産物である」というブルガリア側の主張は、そもそも両接尾辞がスラブ語圏全体において広く用いられるため妥当ではないといったことが論じられる。

4では、アルバニアの南スラブ人がブルガリア人である証拠は、主に現地話者とのコミュニケーションに基づくものだが、それが学術的な証拠にはなりえないこと、またアフアナシイ・セリシチェフの引用が恣意的であり²¹、セリシチェフのマケドニアとブルガリアへの見解の全体像から考えると不当であると述べられる。

5では、マケドニア標準語が公式言語になったのは1944年であり、その規範成立は1945年であることを確認しつつも、その主要な思想が19世紀から20世紀に活躍した思想家で言語学者のクルステ・ミシルコフ(1874–1926)のマケドニア標準語確立に関する考えに沿ったものであると述べる。そして、マケドニア語は標準語に必要な多機能性を完全に備えたうえで、さらに方言要素を取組み、バルカン特有の多言語状況から、スラブ世界で独自の言語に発展し、その言語構造もブルガリア語とは異なる特徴も有していることが論じられている。加えて、社会言語学的な視点として、英語やドイツ語が複数の国の公式語であることをブルガリア語に当てはめようとする試みは誤っているとの指摘や、一民族が複数言語使用をしているユダヤ人の事例や、かつてのセルビア・クロアチア語が、今日セルビア語、クロアチア語、ボスニア語、モンテネグロ語となっているなどの事例が考慮されないのかといった問題点・疑念が提示される。

最後に、マケドニア語は世界的に認知されていること、母語の使用とアイデンティティ選択は基本的な人権で、マケドニア人にとって、自らをブルガリア人と感じることに、マケドニア語をブルガリア語であるとみなすことは不可能であるとの結論付けが行われ、両国の将来は信頼と友好に基づいて成り立つ、と結んでいる。

以上がマケドニア側の反論の趣旨だが、この反論の流れは拡大していった。例えば、著名なマケドニア語学者のマリヤン・マルコビッチ氏は、5月11日のゴツェ・デルチェフ大学(シュティプ市)のホームページには、複雑適応系の考え方に依拠したマケドニア語の発展と正当性についての記事を掲載²²、また15日には一般に向けて、本稿注5にある「マケドニア語に関する憲章」についての解説を行った²³。翌16日には、国外のスラブ語研究者に共闘の依頼を送っている。その中でマルコビッチ氏は、ブルガリ

²¹ アフアナシイ・マトベエビッチ・セリシチェフ(1886–1942)は、20世紀初頭から中頃にかけて活躍したロシアのスラブ語学者。スラブ語研究全般において大きな成果をあげたが、とりわけマケドニア方言の先駆的な研究で著名である。またサムイル・ベルンシュテインら南スラブ語研究の後進も育成した。

²² <https://www.fakulteti.mk/news/11052020/akademik-marjan-markovikj-mokjta-za-adaptacija---kluch-za-dolgovkovniot-kontinuitet-na-makedonskiot-jazik>

²³ <https://www.fakulteti.mk/news/15052020/manu-donese-povelba-za-makedonskiot-jazik-shto-pishuva-vo-nea>(2020年10月13日閲覧)

アに対する反論だけではなく、マケドニアの政治家たちの、実利のための妥協的な政策も危惧している²⁴。マルコビッチ氏は「マケドニアとブルガリアの政治家たちは、マケドニア語が 1945 年からしか存在していないこと、それまではブルガリア語の連続的な一部分であると妥協して、政治的取引を行おうとしている」という情報をリュプチョ・コツァレフ・マケドニア科学芸術アカデミー長から得たので、「マケドニア語は歴史的に連続している存在であり、人工的な言語ではないこと」を、マケドニア及び国際社会に改めて明確に示すために、関係する研究者に協力を依頼した²⁵。この流れを受けて、2020 年 7 月にはマケドニア語関連の著作 4 冊が一举に刊行された²⁶。それらは次の通りである。

1. 『マケドニア語—空間と時間における連続性』
2. 『マケドニア文選』
3. 『マケドニア語への見解』
4. 『マケドニア言語地図』

1は、主に国内の主要なマケドニア語学者の反論となる論文を集めたもの、2は、マケドニアで編まれた古代教会スラブ語、教会スラブ語、民衆語、標準形式それぞれが土台になっているテキスト集で、マケドニア語の歴史を証明するために既に 2011 年に刊行されていたものをこのタイミングで再刊したのである。3は、これまで刊行された国内外の主要な研究者のマケドニア語研究の成果の一部、国外の研究者の反論記事を集めたもの、4は、国際プロジェクト『全スラブ言語地図』の副次物でもあり、マケドニア諸方言における語彙の差異と分布を地図に落としこんで分析したものである。このタイミングで刊行されたものの、準備期間を考えると、ブルガリアへの対抗が、本著作の準備の時点で根底にあったかは明らかではない。

今回の問題が直接的に論じられている論文を含むのは1と3であるが、そこでも特に新しい議論は展開されていない。いずれも、国内外の研究者の既刊の論文を集めたもので、上記のマケドニア語研究所の反論を支持する証拠となる具体例や詳細が、学術的に示されてきたことを訴える性質のものである。書き下ろしの論文もいくつかある。例えば米国の言語学者でマケドニア学士院会員のビクター・フリードマン²⁷は、「学士

²⁴ 現政権が国名変更という妥協案でギリシャとの関係改善を図ったが、ブルガリアに対しては言語問題で大きな妥協を図るのではないかという危惧である。

²⁵ マルコビッチ氏からの同日の私信による。

²⁶ 原語での題はそれぞれ次の通り。1. Колективна монографија: Македонскиот јазик—континуитет во простор и време, 2. Македонска хрестоматија, 3. Зборник на трудови: погледи за македонскиот јазик, 4. Лингвистички атлас на македонските дијалекти (според материјалите на општословенскиот лингвистички атлас-ОЛА) いずれも次のサイトからいずれもダウンロードできる。
<http://manu.edu.mk/континуитет-на-македонскиот-јазик/> (2020 年 10 月 13 日閲覧)

²⁷ シカゴ大学名誉教授で、マケドニア語およびバルカン言語研究の世界的権威とみなされている学者。

院のバイ・ガニョ²⁸:ブルガリアのイデオロギー認知症について」という、かなり挑戦的な題の論文を寄せている。この論文で、フリードマンは、ブルガリアが繰り返すマケドニア語の存在の否定だけではなく、第二次世界大戦時に枢軸国側であったブルガリアがマケドニアを統治下した時に、7000人以上のユダヤ人を強制労働施設に送って死に至らしめたこと、ブルガリア人教師がマケドニア「方言」で話す子供たちを虐待したといったエピソードを添えながら、ブルガリアで世代を超え伝えられるマケドニア語とマケドニアの否定について、非常に攻撃的なトーンでブルガリアを批判している。

2020年10月17日現在、管見では、マケドニア側の反論に対するブルガリア側の公式の再反論は出ていない。

4. マケドニア語問題をめぐる対立構図の変遷:「セルビア対ブルガリア」—「ユーゴスラビア対ブルガリア」—「マケドニア対ブルガリア」

マケドニア語を巡る論争は、南スラブ人の中で長く続いていたことは周知の事実であるが、今日のマケドニア人とブルガリア人の対立は、最初からあったわけではない。むしろ、19世紀中に標準語を確立していたセルビア人とブルガリア人が論を戦わせるテーマであった。セルビア語研究者は、マケドニア人をセルビア人であるとみなし、マケドニア方言はセルビア方言の一部であると主張した²⁹。一方、ブルガリア語学者はこれに反対し、マケドニア方言はブルガリア語であるとの主張を繰り返した³⁰。同じ文脈において、上述のマケドニア出身の言語学者で思想家であったミシルコフの『マケドニア諸問題について』は、1903年にソフィアで刊行後、すぐに発禁処分となる³¹。この書

マケドニア国籍も取得している。

²⁸ バイ・ガニョは、ブルガリアの作家アレコ・コンスタンティノフ(1863–1897)の風刺小説の主人公のこと。彼はどの国民に対しても批判的であり、続けてヨーロッパ人であることの重要性を述べるのが特徴的である。

²⁹ 言語的な面で最も重要な論客はアレクサンダル・ベーリッチ(1876–1960)であった。1905年に刊行された『セルビア語方言地図(Диалектологическая карта сербского языка)』および『東南セルビア諸方言(Дијалекти источне и јужне Србије)』で今日のブルガリア側の方言を、過渡的方言も含めてブルガリア領土内にある方言もセルビア語と関連付けている。また第一次・二次バルカン戦争前後にも積極的にプロパガンダ書籍を国内外で刊行し、マケドニア方言がセルビア語である正当性を論じ続けた。

³⁰ 例えば、ベニョ・ツォネフ(1863–1926)、リュボミル・ミレティッチ(1863–1937)、ステファン・ムラデノフ(1880–1963)などの愛国的な言語学者が対抗した論陣を張った。なお、本稿で入る余地はないが、セルビアとの言語論争はマケドニア問題だけではなく、セルビア東部方言とブルガリア西部方言の属性もあるが、これに関しては現在も主張が変わっていない。ブルガリア語研究所刊行の『ブルガリア方言地図:総合版IV形態論(Български диалектен атлас. Обобщаващ том. IV. Морфология)』(2016)によれば、ニシュ、ピロト、レスコバツ、ブラニェといった地域で話される言葉はブルガリア語の方言であるという。

³¹ 原語では *За македонските работи*。なお、ミシルコフはマケドニアでは民族覚醒の重要人物、独立したマケドニア文章語の始祖と考えられている一方で、一度ならず自身がブルガリア人であるということも述べている。例えば、バルカン危機の1913年にロシア帝国外務大臣にあてられた手紙は、「マケドニアのブルガリア人、クルステ・ミシルコフ」と結ばれている。また、同年、ブルガリア人言語学者のアレクサンデル・テオドロフにあてた手紙には「ブルガリア人として、私は喜んでブルガリアで働きたい」と書いている。『K.P. ミシルコフの日記1913年7月5日–8月30日(K.P. Мисирков. Дневник 5.7–30.8 1913)』(2008)

は、政治的状況を考慮に入れたマケドニア人の民族的属性、およびブルガリア語からもセルビア語からも距離のある中部マケドニア方言に基づくマケドニア文章語の制定の提案などについて論じていた。こうして、マケドニア語問題は明確な形で表面化したのだが、当時は、政治的状況から影響力をまったく持ちえず、その後も、20 世紀中ごろまでは影響力がある論客は存在しなかったと言ってよい³²。

第二次バルカン戦争のブカレスト条約(1913)で、セルビアは、敗戦国ブルガリアから北マケドニアを手に入れた。続く第一次世界大戦後でもセルビアを含む連合国に敗れたブルガリアは、後継国家のセルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国に領土を割譲した。これにより民族復興期からの念願であったマケドニア統合は実現しなかった。

第二次世界大戦中に枢軸国についてのブルガリアは、一時的にマケドニア併合を果たすが、その後チトーが率いたパルチザンが対抗し、1944 年にブルガリアは降伏することになり、悲願のマケドニア統合はここでも実現しなかった。同年に成立していた「マケドニア人民解放反ファシスト会議」は、マケドニア人民共和国としてユーゴスラビア社会主義連邦共和国の構成国となり、合わせてマケドニア語の法的が 1944 年に成立、1945 年に標準語が規範化された。この時点から、セルビア人とブルガリア人の南スラブ語マケドニア方言の属性を巡る直接的な言語論争は影を潜めた。まだ第一線で活躍し、影響力が大きかったセルビア科学芸術アカデミー長の言語学者アレクサンダル・ベーリッチさえも、新しい政治体制のもとで従来の見解を述べることはなく、それは新しい政治体制のもとでは不可能であった³³。

第 2 次世界大戦前後のマケドニア地方では、マケドニア人の自らの言語を持つ民族国家への理想の実現への熱意だけではなく、19 世紀に比べて、マケドニア人の民族

のそれぞれ 192 頁と 168 頁を参照。

³² 但し、19 世紀の革命家ギョルギヤ(マケドニア語)/ゲオルギ(ブルガリア語)・プレフスキ(1817–1895)は注目に値する。ブルガリア人の反オスマン・トルコの闘士として従軍するが、その著作の中では、マケドニア民族やマケドニア語の独立性を述べ、1875 年には『マケドニア・アルバニア・トルコ三言語辞典(Речник од три језика с. македонски, арбански и турски)』を刊行している。これは単なる辞典ではなく、教理問答のような「質問と回答」という形式で、さまざまな政治的なアイディアが三言語で書かれているものである。そこでは「民族とは何か」という問いに対し、プレフスキは「民族とは発生を同一にし、同じ言語を話し、同じように生活・交流し、同じ風習、歌、儀礼を持つ人々のことを呼ぶ。また民族が住む地域を祖国という。したがってマケドニア人も民族であり、その祖国はマケドニアである」と述べている。詳細は、同書の 48–49 頁を参照されたい。

³³ マケドニア語が公式に成立した後の 1951 年に刊行されたベーリッチによる教科書『現代セルビア・クロアチア語文章語第 1 部:音声学とアクセント論(Савремени српскохрватски књижевни језик. Први део: Гласови и акценат)』には、補遺として巻末に「セルビア・クロアチア語方言地図」が付されているが、この地図は 1905 年にベーリッチが刊行した方言地図と異なり、マケドニアやブルガリアの一部はセルビア・クロアチア語方言領域から明確に除外されている。その一方で、1956 年に刊行された『セルビア・クロアチア語史の基礎第 1 部:音声学(Основи историје српскохрватског језика: 1. Фонетика)』では、南スラブ諸語の歴史の解説でマケドニア語の説明は一切ない。また 13 頁には、南スラブ祖語から分化する南スラブのグループとして、「東グループ、後のブルガリア語と古代教会スラブ語グループ、および西グループ、後のスロベニア語・セルビア・クロアチア語グループ」と書かれているのは、ある意味、これまでのベーリッチのマケドニア語観を示しているものとも考えられる。

意識がはるかに高まっていたことが指摘できる³⁴。そしてマケドニア語形成の正当性に関しては、1920年代から40年代にかけて国外の主要な学者から支持されていたことも大きい。例えば、アントワーヌ・メイエ(1866–1936)やアンドレ・バイヤン(1890–1977)といった当時世界最先端のスラブ語・言語学者、ポーランドの著名な方言学者ミェチスワフ・マウツキ(1903–1946)、ソ連におけるスラブ語研究の権威サムイル・ベルンシュテイン(1911–1997)らが、マケドニア方言は単にブルガリア語の方言ではなく、独自性が高く完結した方言群であることを様々な研究論文や百科事典記事で述べたことが後押しになった。さらに、マケドニア語制定時には弱冠23歳だったが、のちにカリスマ的存在となるブラジェ・コネスキら「言語的エリート」が既に頭角を現して、マケドニア人自らの手によってマケドニア語の制定・発展とマケドニア文化を先導できる状態であったことが重要である。また、1951年にイギリス人スラブ語学者レジナルド・デ・ブライ(1912–1993)が『スラブ諸語ガイド』で、外国語で初めてのマケドニア語文法の概要をまとめたこと³⁵、続く1952年には米国人スラブ学者のホレイス・ラント(1918–2010)が学術的に高度な『マケドニア文章語文法』を上梓したことも、マケドニア語の独立性が専門家・非専門家の間で世界的に認知されていく重要なきっかけとなったと言えよう³⁶。

無論、こういった動きにブルガリア側では否定的な論調も出た³⁷。しかし、ブルガリアの徹底的な反マケドニア語キャンペーンは、すぐに始まったわけではない。むしろ、マケドニア語を巡る反セルビアキャンペーンが影を潜め³⁸、民族自決を謳う共産主義の文脈からマケドニア語に対しては許容、もしくは共感を得たと感じられる場合さえあった。これには1947年のユーゴスラビア首相ヨシフ・ブロズ・チトーとブルガリア首相ゲオルギ・ディミトロフの「ブレッド合意」が関係していると思われる。この合意はユーゴスラビアとブルガリアの協力関係を改善・強化するもので、そこでは、ブルガリア側によってマケドニア語やマケドニア人が認められており、ピリン・マケドニア(ブルガリア領土内の歴史的なマケドニア地方の一部)に、ユーゴスラビアからマケドニア語教師を派遣して教育活動することも認められ、1948年まで実際にマケドニア人マイノリティに対し、マケドニア語で授業が行われていたことが知られている。また、この当時は、ブルガリアの首都ソフィアでもマケドニア語の書籍や雑誌などが刊行されていた。こうしたブルガ

³⁴ ブルガリア人共産主義者には、マケドニアが国家として成立する以前から、マケドニア民族の独立性を支持していたものが少なからずいた。例えば、1926年からソ連に亡命していたブルガリア人政治家のステラ・ブラゴエワ(1887–1954)は、1942年にモスクワで行われた第2回全スラブ人会議の講演で、「セルビア、マケドニア、クロアチア、モンテネグロ、スロベニア民族の命、自由と名誉のための闘争」という表現を使っている。『第2回全スラブ人モスクワ会議 (Второй всеславянский митинг в Москве)』(1942)の40頁を参照のこと。

³⁵ 原語では Guide to the Slavonic Languages.

³⁶ 原語では Grammar of the Macedonian Literary Language.

³⁷ 例えば、Philology Broad and Deep. In Memoriam Horace Gray Lunt (2014)の4頁にあるラントの回想を参照されたい。

³⁸ 「反ユーゴスラビア」ではないことに注意されたい。

リアとユーゴスラビアの関係は、1948年にスターリンとチトーが決裂してからは、冷ややかに becoming いく。それでも、著名なブルガリア語史研究者キリル・ミルチェフ(1902–1975)は、『マケドニア文章語について』という公開講義を行うことができた。彼は1952年にはこれをパンフレットとして刊行し³⁹、マケドニア文章語が新たに形成されることはバルカン半島での言語状況の歴史から典型的な事例であり、社会主義の文脈において正当化されること、また言語構造に関しても、マケドニア語はブルガリア語と共通点が多いが、文章語としては(方言レベルではブルガリア語にも知られている特徴とはいえ)固有の特徴もあり、両文章語が並立していることは十分に正当であることを論じている⁴⁰。

ブルガリアがマケドニア問題に対してユーゴスラビアと対立する立場を明確に示し始めるのは1950年中頃から末にかけてである⁴¹。一方のユーゴスラビア側も、1957年にも様々な言語学者が反論を行う。例えば、スロベニア人の南スラブ語学者ヤンコ・ユランチッチ(1902–1989)は、スラブ語研究史の中で、おそらく初めて南スラブ諸語のみを扱う『南スラブ諸語』という著作を刊行した。この本の前書きで、ユランチッチは次のように述べる。「冷静に見て、もしマケドニア語とブルガリア語の発生的関係が、マケドニア語とセルビア・クロアチア語とのそれよりも遙かに大きいことが示されても、それはマケドニア語がブルガリア語の方言であるということを意味しない。両言語が大変似ていたとしても、マケドニアの場合、誤った民族問題の理解と解釈に対して一世紀以上も戦ってきたことで形成された民族属性の感覚が、決定的な意味を持つのである」⁴²。しかも、本書の第三節「南スラブ諸語文章語」(15–22頁)では、古代教会スラブ語史が2頁、スロベニア語文章語史が1頁弱、セルビア・クロアチア文章語史が約3頁、マケドニア文章語史に2頁が割かれているのに対し、ブルガリア文章語史の解説は僅か3行で、しかも内容は事実と反しており、ブルガリア言語文化史への冒涇とすら言えるものであった⁴³。これらのことから、ユランチッチの著作がブルガリアに対抗する政治的な意図をもって書かれたものであることが読みとれる。

さらに、1959年にはコネスキ他のマケドニア人言語学者が執筆する『マケドニア文章語について』というパンフレットを英語とロシア語で刊行し、マケドニア語の歴史的・現在の正当性を国内外に示すなどして対抗している⁴⁴。

³⁹ 原語では За македонскиј литературен език。この著作は1950年のスターリンの著名な『マルクス主義と言語学の諸問題(Марксизм и вопросы языкознания)』を受け、新しい民族語の形成の正当性を示す文脈で書かれている。

⁴⁰ ミルチェフ『マケドニア文章語について』の8–10頁参照。

⁴¹ サムイル・ベルンシュテインの未刊の日記『記憶のジグザグ(Зигзаги памяти)』第2巻の記述による。

⁴² 原語では Južnoslovanski jeziki。

⁴³ そこで書かれているのは、次のみである。「最初のブルガリア文章語形成の試みは16世紀に遡る。現代の文章語は、19世紀半ばにペトコ・ラチェフ・スラベイコフが東部タルノボ方言に基づいて形成したものである」

⁴⁴ 原語では О македонском литературном языке/On the Macedonian Literary Language。いずれもベ

以上のように、ユーゴスラビアとブルガリアには緊張関係が確かにあったが、それでも 1960 年代中頃のブルガリアの出版物には、まだ「マケドニア語」という表記が見られた。例えば、大学生向けの教科書『言語学』(1965)でも、マケドニア語は南スラブ諸語の中の独立した一語として扱われていた⁴⁵。これはおそらく、1963 年 1 月に行われた、ユーゴスラビアのチトー大統領とブルガリアのトドル・ジフコフ共産党書記長との会談が関係していると考えられる。この会談では、経済等で協力関係を強化する一方で、双方が衝突に関わる問題を公に議論しないことで合意したのである。

こうした風潮が決定的に変わったのは 1968 年以降である。ブルガリアは、非公認のマケドニア正教会が 1967 年に独立を宣言したことから既に不満を抱えており、1968 年 3 月 3 日を「ブルガリア解放記念日」に、8 月 2 日を「イリンデン蜂起記念日」に制定する。前者は 1878 年のサン・ステファノ条約でマケドニアを含んだ「大ブルガリア公国」が成立した日であり、後者は 1903 年に起きた反トルコの蜂起の日だが、これはマケドニア人にとってはマケドニア解放と考えられる出来事である一方、ブルガリア人にとっては「ブルガリア人の蜂起」であった。ユーゴスラビアは、こういったブルガリアの民族主義的な態度に反発した⁴⁶。また、同年ブルガリア軍を含むワルシャワ条約機構軍がチェコスロバキアに侵攻したことに對し、チトーはこれを非難し、チェコスロバキアを支持した結果するなどして、両国の対立は深まった。この時期、ブルガリア学士院会員イワン・レコフ(1904–1978)の著作『スラブ諸語比較歴史・類型的文法概論』(1968)が、マケドニア語を独立した一言語と扱っていたことで回収処分となったことは、少なくともスラブ語学界では、言語名に関する象徴的な事件として挙げられる⁴⁷。

以降、ブルガリアによる反マケドニア語の態度は国内で徹底したものであった。例えば、1970 年代にブルガリア語研究所に勤務する言語学者のディナ・スタニシェワ(1928–2015)は、「マケドニア語は個別の言語である」と発言したため、1979 年に研究所を解雇された⁴⁸。

興味深いのは 1976 年に起きたスベトミル・イワンチェフ(1920–1991)・ブルガリア語研究所所長解任事件である。ブルガリア標準語は、歴史的に主に東部方言をもとに成立したが、そもそも首都ソフィアがブルガリア西部に位置していることもあり、次第に西部方言の要素が標準語に流入していた。西部方言の発音はマケドニア方言に近いわ

オグラードの「ユーゴスラビア」出版局から刊行されている。

⁴⁵ イワン・ドゥリダノフ、ウラジミル・ゲオルギエフ著『言語学 (Езикознание)』(1965)の 307 頁参照。

⁴⁶ 例えばクロアチアの言語学者で、スラブ語標準語研究で著名なダリボル・プロズビッチ(1927–2009)は、「今日の言語学に照らしたマケドニア言語問題」という論文でブルガリアの態度に反駁している。この論文では、何らかの言語グループの特徴の総体が同一のモデルに帰せられる「ディアシステム(共通体系)」と標準語は、レベルの違うカテゴリーで区別されるべきであり、標準語のカテゴリーにおいてマケドニア語が独立した言語であることを論じた。詳細は『我々のテーマ (Naše teme)』(1968)第 2 号、223–239 頁を参照のこと。

⁴⁷ 原語では Кратка сравнително-историческа и типологическа граматика на славянските езици。

⁴⁸ ブルガリアの言語学者ルセリナ・ニツォロワ氏からの私信による。

けだが、従来は西部方言要素の絶え間ない流入は、伝統的な言語規範の観点から肯定的に受け取られていなかった。しかし、見方を変えると、ブルガリア標準語における西部方言の要素の正当化は、マケドニア語の正当性の否定に間接的につながるわけである。これに対し、イワンチェフ所長は、伝統的な東部方言に基づく標準語規範の維持を主張し、西部方言の要素が規範に入ることについて反発した。これがきっかけとなり、彼はブルガリア語研究所所長から解任された⁴⁹。

1986年にブルガリア学士院ブルガリア語研究所から刊行された約500頁の大著『南スラブ諸語研究概説』において、項目としてマケドニア語が一切なく、ブルガリア語の解説の「文章語と地方初期規範」という節のなかで、本論5節で触れる1978年の冊子の要約してあるだけであることも、同じ文脈から考えることができる⁵⁰。

この姿勢は同ブロックの友好国に対しても徹底的であった。1960年代末、ソ連政府は、ブルガリアを政治的に刺激するのを避けるために⁵¹、ソ連学士院スラブ・バルカン学研究所(現ロシア学士院スラブ学研究所)でマケドニア語研究を行うことは事実上不可能であったという。それを示すエピソードとして次のようなものがある。同研究所でブルガリア語とマケドニア語の地名に関する修士論文を執筆したエドワルド・グリゴリヤンという研究者は、「マケドニア語」という単語が題目に入っていたため論文審査が禁止され、やむを得ず言語名を削除したという。なお、その後日談も強烈である。グリゴリヤンの著書はモスクワで刊行できなかつたため、1975年にエレバン(アルメニア)で出版した。その謝辞で言及されたブルガリア人言語学者マクシム・ムラデノフ(1932-1992)とドル・ボヤジエフは、翌1976年、マケドニア語に関わる出版に協力したかどでブルガリア政府によってブルガリア語研究所から解雇された⁵²。さらに、グリゴリヤンの指導教員で、1970年代に南スラブ文章語形成史に取り組んでいた著名なスラブ語学者であるニキータ・トルストイ(1923-1996)は、マケドニア文章語形成史も研究テーマに含めたため、ブルガリアからは事実上ペルソナ・ノン・グラータ扱いであったという⁵³。そのほかにも、上述のベルンシュテインの回想録には、1969年以降ブルガリア高官や政治

⁴⁹ ベルンシュテイン『記憶のジグザグ』第2巻、1976年3月22日の回想による。

⁵⁰ Увод в изучаването на южнославянските езици の307-315頁を参照されたい。なお、ブルガリア学士院会員イワン・ドゥリダノフ(1920-2005)によって書かれた本書の出版許可のための内部講評は興味深い。ドゥリダノフによると、ユーゴスラビアでは南スラブ語研究において「客観的で、学術的な叙述」を期待することができず、本稿注40で言及したユランチッチの著作『南スラブ諸語』は、そのような例であるという。1977年にモスクワ大学出版から刊行された著書『スラブ諸語 (Славянские языки)』にも同様の「誤り」があるので、それらを踏まえて「正しい言語認識」に基づく南スラブ諸語の総合的な研究書が求められていたという。このドゥリダノフの内部講評は、筆者が偶然手に入れたもので、刊行されたものかどうかは知らない。筆者がソフィアの古書店で購入した『南スラブ諸語研究概説』は、ドゥリダノフの死後売却された蔵書にあり、上に言及した内部講評のタイプ原稿が本書に挟まれていたものである。

⁵¹ これには当時のスラブ・バルカン学研究所所長であったドミトリー・マルコフ(1913-1990)が親ブルガリア研究者であったことも大きいようである。

⁵² ロシアの言語学者スベトラナ・トルスタヤ氏からの私信による。

⁵³ 上記トルスタヤ氏からの私信による。

的に影響力がある研究者がモスクワを訪れ、マケドニア問題に関するソ連学者のマケドニア語に対する態度に抗議を行い、その圧力でさまざまなマケドニア関係の出版計画が取り消されたことが描かれている⁵⁴。

また、1990年に『マケドニア・ポーランド/ポーランド・マケドニア辞典』を刊行したポーランドのマケドニア語学者ブウォジミェシ・ピャンカ氏によると、その原稿は80年代には既に出来上がっていたものの、当時ブルガリアから野菜類の輸入が止まることを恐れ、ポーランド政府がその辞書の刊行を認めなかったそうである⁵⁵。こういったエピソードは枚挙にいとまがない。

1990年2月にブルガリアの共産党独裁が終わるが、同年5月には、1923年にソフィアで設立され1947年にユーゴスラビアとの外交過程で廃止された『マケドニア学術研究所』が復活したことは注目に値する。これはマケドニア地方の言語・文化・歴史がブルガリアの一部である正当性を示すために、政治的問題を積極的に取り組む研究機関となった。それは、マケドニア語(学)の不当性を論じるパンフレット類を次々と刊行していることから明らかである⁵⁶。

1991年にマケドニアがユーゴスラビアから独立した際に、ブルガリアは世界で初めてそれを承認する国家となった。しかし、言語問題に関しては全く妥協がなかった。例えば、ブルガリア学士院が刊行した約600頁の百科事典的な『スラブ諸語:言語構造概論』(1994)には、相変わらずマケドニア語の項目や言及が皆無である⁵⁷。スラブ語研究の学術的な価値から考えた場合、言語構造の縦割り記述の百科事典的な他の類似著作と比べて、この本が特に優れている画期的な点はほとんどないと言ってよい。

⁵⁴ 『記憶のジグザグ』第2巻の記述による。例えば1969年4月26日、ジフコフ共産党書記長に近い立場であった文学者で、ブルガリア学士院会員バンテレイ・ザレフ(1911–1997)がソ連学士院スラブ・バルカン学研究所を訪れたが、その際に、「ソ連にはマケドニア語・文学研究を行うものがあるが、それを禁止し、マケドニア問題でより明確にブルガリア側を支持しないと、ブルガリアとソ連の友好関係に深刻な問題がもたらされると脅迫された」と書いている。また、1971年10月4日には、ブルガリアの歴史家ディミトル・コセフ(1904–1996)が研究所に訪れ、いかなるマケドニア人もマケドニア語も存在しないこと、それに対しソ連が明確な支持をしないことに強い不満を示していたと書かれている。1979年2月22日の記録によれば、ベルンシュテインの弟子であったリーナ・ウシコワ(1933–2018)は、1979年中にモスクワ大学出版会のシリーズ『世界の言語』の1冊として『マケドニア語』を刊行する準備をしていたが、それを知ったソフィア大学学長が抗議のためにモスクワ大学を訪問し、ウシコワの著作は結局刊行されなかった。

⁵⁵ 2004年に、ピャンカ氏が筆者に辞典を進呈されたときの会話に基づく。

⁵⁶ いくつかを挙げるとすると、イワン・コチェフ他著『マケドニア文章語として知られる存在の育成 (The Fathering of What is Known as the Macedonian Literary Language)』(1994)、ドラギン・ドラグネフ著『ブラジェ・コネスキ:マケドニア言語学者あるいはセルビアの政治活動家 (Блаже Конески. Македонистки лингвист или сръбски политработник)』(1998)、ベセリン・トライコフ著『クルステ・ミシルコフ:ある曖昧なパーソナリティ (Кърсте Мисирков. Една объркана личност)』(1998)などが挙げられる。

⁵⁷ 原語ではСлавянски езици: граматични очерци。なお、この著作の11頁には、「ブルガリア語が公式言語であるブルガリア共和国以外でも、一定数の話者が外国に存在している。その例として、旧ユーゴスラビアのいくつかの共和国、旧ソ連の共和国(ウクライナ、モルドバなど)、ルーマニア、ギリシャ、トルコなどであり、それらの国では小規模の移住者の居住地域がある」と書かれている。

むしろ、ブルガリア言語学界の最高権威の見解として、マケドニア語が存在しないことを示すためだけに刊行されたのかと思わせるほどである。このような極端な態度は、今日まで変わることなく続いている⁵⁸。

5. 1978年のマケドニア語・ブルガリア語論争はどのようなものだったか

このような文脈で、1978年、ブルガリア学士院附属ブルガリア語研究所は、ブルガリア民族復興100年を記念して、『過去と現在におけるブルガリア語の統一性』という43頁に及ぶ論文を、研究誌『ブルガリア語』(第25号第1巻)に掲載した。著者は「ブルガリア語研究所」となっている。この論文では、言語の形態には、「書記法を持たない方言」、「書記法を持つ方言」、「民族言語の地域的文章語」といったものがあり、ブルガリア語には、「民族言語の地域的文章語」として、ルーマニアのバナト地方で行われるカトリック・ブルガリア人の「ブルガリア語のバナト・ブルガリア地域文章変種」と「ブルガリア語のマケドニア人民共和国地域文章変種」がある、と述べている。いわゆるバナト・ブルガリア語の説明はわずか8ページ強と僅かであるから、ブルガリア人アイデンティティを保っているバナト・ブルガリア人の言語は、マケドニア語がブルガリア語であることを示すためだけに例として出されていると言える。上に概観した2020年の冊子では、バナト・ブルガリア語のことが全く引き合いに出されないことから、そう結論づけられるだろう。

ここでは細部に踏み込むことはできないが、論点は「言語史」、「19世紀・20世紀前半の外国人研究者の見解」、「方言的連続性」、「民族復興期のマケドニア人の文人のブルガリア人アイデンティティ」、「1944年に形成された文章語はブルガリア方言に立脚し、それは歴史的に否定できず、またその特徴もブルガリア方言全体に特徴的」というもので、細部にいくつか差異はあるが、論拠と主張の骨子は概ね2020年の冊子と同じである。

マケドニア側も同年、『マケドニア語について』という冊子を、マケドニア語研究所の特別出版物11号として刊行した⁵⁹。ここでは、バナト・ブルガリア語とマケドニア語は事実上「方言学の枠組み」で扱われていて、3つの言語が対等の文章語ではなく、2つが

⁵⁸ しかし、個人レベルでは意見が異なることもあるのは、どのような問題でも同じであり、その理由は必ずしも政治的なものだけではない。個人的なエピソードをいくつか挙げる。2010年、国際学会で出会ったある中年のブルガリア語研究者との会話で、筆者が「あなた方の論理ではマケドニア語は存在しないのでしょ」と皮肉な笑いを込めて言うと、気分を害した様子で「理性的なブルガリア人であれば、マケドニア語の存在を理解し、それを認めています」と反論されたことがある。2018年に参加したある国際学会で、友人のロシア人学者がマケドニア語で研究報告を行ったところ、ある著名なバルカン言語学研究者は、「南西ブルガリア語方言が本当に上手なロシア人」と真面目に言った。なお、筆者が親しくする比較的高齢のブルガリア人研究者は、「私の祖母はマケドニア出身で、自分はブルガリア人だと言っていました。私も祖母はブルガリア人だだと思います。今日、祖母がブルガリア人ではなくマケドニア人と扱われたら、彼女にとってこれは本当にショックなことで、到底受け入れられないでしょ」と言っていた。

⁵⁹ 原語では За македонскиот јазик. 同年に英語版、仏語版も刊行されている。

下位変種と扱われることに根拠がないこと、バナト・ブルガリア語が小規模コミュニティで行われているのに対し、マケドニア語は国家の公式言語として機能し、マケドニア語がマケドニア社会の中で多文章語に特徴的な機能性を有していること、マケドニア標準語の方言基盤は隣接するスラブ諸語から離れていることなどが述べられている。最後に、資料として、マケドニア語・文学が独自のものであると表明した、ブルガリア人も含む国内外の著名人による文書の抜粋や公式宣言文書、第二次大戦中にマケドニア語で記された文書、マケドニア人によるマケドニア語の独自性を説いた論文が付されている。こちら、2020年に比べて際立って異なる特徴的な議論は無かったようである。

6. 社会言語学的な観点

以上、ブルガリア語とマケドニア語を巡る論争を通時的に概観したが、明らかなのは、ブルガリア側の強硬な姿勢、すなわち、マケドニアとブルガリアの言語文化における歴史的な統一・連続性という観点から、マケドニア語を別個の言語として扱うことはできない姿勢を崩さないということである。こうした態度はブルガリア史における栄光への固執、また、場合によっては将来への布石や望みかもしれない。ブルガリア語とマケドニア語との方言的連続性は疑いが無いが、他方、マケドニア語はブルガリア語とは異なる規範と構造をもった標準語形態を有し、それが北マケドニアは無論のこと、在外でも広く認知され、あらゆる言語使用領域で十分に機能していることは、全く否定できない。

昨今は言語問題に関して、ブルガリアの主張に対し、マケドニア側が応戦するという構図が典型的であるが、ブルガリア側はそれに対して、持論を繰り返すだけで、学術的な論争にはなっていないように思われる。例えば、1978年のマケドニア側の反論に対し、翌1979年、ブルガリア語研究所は著名な外国人研究者の既刊の論考の抜粋を集めた『南西ブルガリア方言に関する外国人研究者の見解』を刊行する⁶⁰。しかしながら、収録されている論文は19世紀から20世紀前半にかけての研究が21本であるのに対し、1945年以後の論考はわずか3本しかない。言うまでもなく、この論集に著作が収録されている著名な研究者が生きていた時代は、マケドニア標準語の形成が想像すらできなかった時代なので、その見解を文脈の異なる20世紀末の状況に直接的に当てはめられるかどうかは定かではない。

また、問題に思われるのは、1978年の冊子には、明らかに不十分ではあるものの、社会言語学的観点を含み、独自の見解で「言語変種」を扱うところがあったのに対し、2020年の冊子には社会言語学的議論が一切抜けており、ブルガリア人から見て説得力があると思われる例だけが選択されており、いわば学術的に後退したことである。言語問題が、歴史・政治・社会の様々な問題と接点があることは、これまでの他の地域での論争から明らかであるが、2020年の冊子の著者に社会言語学の専門家がいなかった

⁶⁰ 原題は Чуждестранни учени за югозападните български говори.

め、その面の理論武装が十分でなかったのは確かである。

無論、ブルガリア側の社会言語学が決して発展していないわけではない。しかし、マケドニア語問題に関しては、多角的な見方が難しいようである。最も権威的な社会言語学者の一人であるブルガリア学士院会員ミハイル・ビデノフの最新の著作においても、世界の多言語状況について概観したうえで、「いわゆるマケドニア公式言語」が様々な標準語形成の条件をクリアし、「実験として成功」していることを認めてはいる。その一方で、マケドニア側の主張との具体的な議論がないまま、マケドニア側の主張は「真実に反する」して一蹴しており、バナト・ブルガリア語との比較も含めて、1978年のブルガリア学士院の冊子とほぼ同じ論旨が展開されるだけである⁶¹。

しかし、仮に何らかのさらなる理論武装があったとしても、基本的な社会言語学の理論や研究成果に照らすと、マケドニア語がマケドニア語と名乗る正当性を有しているように思われる。例えば、言語計画という側面では、1944年以來今日までの間に、アイナー・ハウゲン(1966)がその言語計画論で述べた、規範選択、規範制定、規範導入、精密化という基本的な4段階を経て、安定した標準語が形成されていることは誰も否定できない。当初は「ベオグラードの指揮下で人工的に導入された規範」と仮に指摘されたとしても、現在はマケドニア標準語がマケドニア社会のあらゆる領域において定着し、無理なく機能しているのは明らかである。

また世界を見ると確かに、複数の民族や国家が、ある程度の言語構造の違いがあるにしても、一つの言語名称の言語を公式に使うこともある。例えば、英語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、かつてのセルビア・クロアチア語などで、その理由は様々である。その一方で、類似した、あるいはほぼ同一の言語群が、これもまた様々な理由で、別個の言語で呼ばれ、別個の文脈において機能することも事実である。例えば、ウルドゥ語とヒンディ語、タジク語とペルシャ語、今日のセルビア語、ボスニア語、クロアチア語、モンテネグロ語など、こちらにも多くの例がある。

そして、重要なことはこのような状況が静的ではないことである。なんらかの言語計画を経ることにより、ある言語体系が属する方言連続体の中から別個の「標準語」に昇華することは、全く珍しくない。専門的に言えば、ハインツ・クロス(1967)が提唱した *Ausbau* (造成) 言語と *Abstand* (隔絶) 言語のうち、前者に該当する⁶²。例えば、ノルウェー語はデンマーク語との関係において *Ausbau* 言語だが、同じことがマケドニア語とブルガリア語に対しても言えるのである。その際、標準化の度合いは必ずしも究極的な問題とはならない。スラブ圏の最新状況に目を向けると、例えば、ポーランド北部の少数話者言語であるカシュブ語は、まだ標準語の形成過程の最中だが、2005年以來、

⁶¹ 『ブルガリア言語政策 (Българската езикова политика)』(2015)の17-38頁を参照されたい。

⁶² なお、*Abstand* 言語とは、二つの言語構造そのものに連続性が見られないゆえに別言語となっている存在である。例としてフランス語とブレトン語の関係が挙げられる。詳細は、*Anthropological Linguistics* 誌に掲載された論文 *Abstand Languages and Ausbau Languages* を参照されたい。

公式にポーランド語とは別個の言語と扱われ、法的には「地域言語」という地位を得ている。無論のことだが、マケドニア語の標準化の度合いは、1945 年以來の 75 年間の間に高まり、カシュブ語の標準化の度合いとは比較にならないほど高いものである⁶³。

社会言語学者のダニエル・バッジオーニ(2006)は、その著作『ヨーロッパの言語と国民』において、ヨーロッパにおける共通語形成史を、「エコ言語革命」という概念から検討することを提案している⁶⁴。第一次エコ言語革命は主に西欧における変化で、ルネサンス期にラテン語から土着語へ大きく舵を切ることで、16 世紀から 18 世紀末までに土着語は規範を得て、標準語化の過程が推し進められることである。19 世紀からは支配国の共通語から単一の国民国家の言語へという流れがあり、これが第二次エコ革命であるという。バッジオーニはこの流れを 19 世紀以降、冷戦終了後の国家解体機の 20 世紀末までと広くとらえ、マケドニア語の形成は国民国家と国民言語形成の最終段階の一つとみなしている。このように大きな文脈で考えるならば、マケドニア語のケースはヨーロッパにおいて決して特殊なものではないことが示唆される。

こういった社会言語学的な標準語の在り方や形成、言語名称に関わる多様性を考慮すると、一義的にマケドニア語をブルガリア語の一変種と扱うことには難しさがある。また、繰り返しになるが、歴史主義的なブルガリアが、その一方で、現代史のダイナミズムを否定しているという矛盾を感じざるを得ない。ブルガリア側が主張する「客観的な学術的真実」に⁶⁵、なぜ上記のような論点が含まれないのかが不明瞭のままである。

仮にブルガリアの主張を踏まえて EU の言語名の在り方を再検討すれば、EU の言語の一覧表はかなり現状と異なるだろうが、そのようなことは、まず考えられない。なぜならば、確かに、EU 加盟国(2020 年現在)において、ドイツ語(オーストリア、ドイツ、ベルギー、ルクセンブルク)、ギリシャ語(ギリシャ、キプロス)、フランス語(フランス、ベルギー、ルクセンブルク)のように一つの言語名が複数の国家で使われている場合もあるが、これらの言語名は、少なくとも今日では、各国の話者の意志を無視して他国から押し付けられたものではないからである。

7. 結びに変えて:ヨーロッパの文脈と国際社会

最後に、マケドニア側の懸念にもあったが、ブルガリアによるマケドニア語への否定的な態度は、言語の多様性と寛容を重んじる今日の「ヨーロッパ的価値観」、特に EU

⁶³ この点において、ウクライナ人ナショナリスト言語学者たちは興味深い。自らの言語が「ロシア語の小ロシア方言」から歴史的に成立した文章語であるにもかかわらず、「ルシン語」に対しては「ウクライナ語の方言」であり、独自の言語に昇華すること、既にしていることに否定的な態度を取るものである。

⁶⁴ 「エコ言語」はバッジオーニの用語で、「言語のエコノミー」と「言語のエコロジー」の双方を含む概念であり、ここでいう「革命」は言語の差し替えになること指している。「第一次エコ言語革命」では、支配的な言語の一元的支配から土着の共通語との共存が生じ、「第二次エコ言語革命」では、共通語から国民国家の言語への差し替えを指す。詳細はダニエル・バッジオーニ著(今井勉訳)『ヨーロッパの言語と国民』筑摩書房、2006 年参照のこと。

⁶⁵ 本校 5 頁のブルガリアの提案するロードマップの第三項目を参照されたい。

加盟の文脈の点で、ずれているように映る。この点で興味深いのは、スロベニアの言語学研究誌『言語学ノート (Jezikoslovni zapiski)』である。最新の第 26 号(2020)の序文には、「編集部の立場」として、「人々に対して、自らが属すコミュニティと自身を規定する言語名を放棄するように求めることは、非学術的、非専門的、非倫理的、非人間的であり、あらゆる規範に反している」と、スロベニア語、ブルガリア語、マケドニア語、ロシア語、英語で宣言され、続くページには、マケドニア語を否定するブルガリアの文書からの切り抜きとスロベニア語訳が掲載されている⁶⁶。

筆者の知るところでは、言語問題に関わるマケドニアとブルガリアのお互いの出版物に対する、冷静で学術的な論争はまだ行われておらず、これまでの論争と同じように平行線をたどっているように映る。EU 加盟の可否という点において、ブルガリアにはある種の強みがある一方で、そのまさに EU の文脈において、多様性を重んじる傾向が強い国際社会を、ブルガリアがその主張から味方につけるのは難しいだろう。既によく知られているように、EU は共通の政策として多言語主義を支持し、EU 加盟国は EU 基本権憲章第 3 編「平等」、第 22 条「文化、宗教および言語的多様性」において、これを尊重することが規定されているからである⁶⁷。

ただ、経済的な安定や発展という面において、いち早い EU 加盟は北マケドニアの悲願であり、ギリシャとの対立回避のために国名まで変更したことを考えると、実利をとって、北マケドニア側の妥協もありえなくはないかもしれないし、ギリシャとの経験からブルガリアは今がチャンスと思っているところはあるだろう。尤も、現在のブルガリアの与党が自国民から支持を得るための姿勢という面があることも否めない。

また EU がマケドニア側をあらゆる面において支持したとしても、同じく実利の点から、ブルガリアが EU を脱退するようなこともないだろう。両国は妥協点が見出せるのか、その場合にはどのようなものなのか、予想を立てることは難しいが、以上に見た歴史的背景から考えて、今回の出来事が、今後のブルガリア・マケドニア関係の大きな転換点となる可能性はある。しかしながら、マケドニア語が独立した言語であるという、北マケドニアのみならず世界での広い認知度が、今回の起こりうる政治的妥協で覆ることは、まずありえないと言ってよいだろう⁶⁸。

⁶⁶ スロベニアの言語学者 Mladen Uhlik 氏から、同誌の最新号(PDF 版)の提供を受けた。

⁶⁷ 「憲章」の本文は次を参照した。https://ec.europa.eu/info/aid-development-cooperation-fundamental-rights/your-rights-eu/eu-charter-fundamental-rights_en (2020 年 10 月 18 日閲覧)

⁶⁸ 言語学者に政治的問題の予測は筋違いとも思えるが、敢えて妥協の可能性を挙げるとするならば、現マケドニア政権がブルガリア語とマケドニア語の連続性を認めたとうえで、「マケドニア語(北マケドニア共和国の憲法での名称に基づいて)」という 1999 年の方法を踏襲しつつ、アステリスクなしの記載方法であろうか。

【補説】

以上は、一般の方が関心を持ちそうな歴史と政治の文脈を中心に扱い、言語そのものについては踏み込まなかった。読者の中には、ブルガリア語とマケドニア語の具体的な違いについて関心を持つ方もおられるかもしれないので、以下に簡潔に説明しておく。

1. ブルガリア語とマケドニア語の言語系統的な位置づけ

ブルガリア語とマケドニア語は、インド・ヨーロッパ語族バルト・スラブ語派・南スラブ語群・東部グループに属する。系統的に近い言語は、スロベニア語、旧セルビア・クロアチア語（現在はセルビア語、クロアチア語、ボスニア語、モンテネグロ語）であり、古代教会スラブ語も南スラブ語に属していた。南スラブ語群の東部グループ（マケドニア語とブルガリア語）と西部グループ（スロベニア語と旧セルビア・クロアチア語）の違いは次のように説明される。前者はバルカン半島で行われるインド・ヨーロッパ語族の様々な言語（アルバニア語、ルーマニア語、現代ギリシャ語など）との長期にわたる相互的な言語接触の結果、本来のスラブ語とは著しく異なる言語構造を有するようになったのに対し（これを言語学では「バルカン化」と呼ぶ⁶⁹）、後者はスラブ語として比較的、保守的な言語構造を維持しているグループである。なお、以上に挙げた言語名はあくまでも標準語レベルの話である。方言レベルにおいて、言語を区別する非常に際立った言語境界はむしろ稀であり、スロベニアからマケドニア、ブルガリアまで、漸次的に言語構造が移行している。従って、セルビア領土内で話されるセルビア語南部・東部方言は、少なくとも今日の言語構造の点において、セルビア語の標準語よりは、マケドニア語やブルガリア語に近い（すなわち、セルビア標準語よりも「バルカン化」が進んでいる）。

2. 「バルカン言語」としてのブルガリア語とマケドニア語

ここでいう「バルカン言語」とは、単に「バルカン半島に位置している言語」という意味ではなく、「バルカン半島および隣接する地域に位置し、言語接触により共通の言語構造を発達させた言語」のことである。そういった共通の特徴を「バルカニズム」と呼ぶ。なお、言語学と政治学や歴史学における「バルカン」は必ずしも一致しないことに注意が必要である。後者においてルーマニアはバルカン地域に含まれないが、ルーマニア語自体は、その言語的共通特徴とその発生メカニズムを考慮するとバルカン言語の一つであるとみなされる。

文法レベルにおける典型的なバルカニズムとして知られる現象を、以下にいくつか

⁶⁹ 「バルカン化」という用語は、政治学では、概ね大きな政治単位が分裂して小さくなることを意味するが、言語学では、バルカン半島の諸言語が、長期にわたる多言語併用状況と言語接触を繰り返すことによって、言語発生的な関係を超えて、共通の言語構造を持っていく収斂的現象を指す。

挙げてみる⁷⁰。

1. 語源的に「欲する」を意味する動詞が、未来を表す助動詞・小詞となる
2. 動詞不定形の消失
3. 文法範疇としての伝聞法の存在
4. 与格と属格の合一
5. 後置冠詞の使用
6. 目的語の二重使用
7. 形容詞比較級・最上級の分析的表示
8. 格変化の消失と前置詞による代替

これらはスラブ祖語には存在しない現象であり、現在のスラブ諸語においても典型的ではない現象である。そして、これらは概ねマケドニア語、ブルガリア語の標準語および方言全体、そしてセルビア語の東南方言にのみ知られる特徴である。

3. ブルガリア標準語およびマケドニア標準語の違い

方言レベルにおいては、ブルガリア語とマケドニア語の方言は確かに連続体をなすが、標準語の母体となる方言は異なっている。本論で述べたように、現代マケドニア標準語の基礎となった方言群は、方言連続体のうち西側の方言が母体になっており、特にいえば中部マケドニア方言であり、標準語は西部マケドニア方言や他の方言の要素も多く含んでいる。

これに対し、現代ブルガリア標準語は東部方言がその基礎となっている。現代ブルガリア語の発生時期については様々な意見があるが、(中部・)東部方言が文章語の基礎として置かれたのが19世紀中ごろであり、その後、民族解放期に現代ブルガリア語が成立したとされることが多い。なお、この時期には、マケドニア方言も含んだ西部方言を基礎とした標準語の形成も議論されたが、それが受け入れられることはなかった⁷¹。なお、初めての公式正書法が成立したのは民族解放期からやや遅れた1899年である。その後1921年、1923年、1945年に正書法が改正され、現在に至る⁷²。

多少乱暴な例えではあるが、何らかの事情で日本の中に「関西国」と「関東国」が建国されたとしよう。関西地方の方言群をもとに「関西標準語」が形成され、一定の時間

⁷⁰ 「バルカニズム」についての詳細は、例えば、『言語接触ハンドブック (The Handbook of Language Contact)』(2013)におけるブライアン・ジョセフの記事「バルカン半島における言語接触 (Language Contact in the Balkans)」などを参照されたい。

⁷¹ 例えば、宗教家で文化人のパルテニイ・ゾグラフスキ(1818-1876)がそのような考えを持っていたことが知られている。なお、この人物はマケドニアではマケドニア人とみなされている。

⁷² 『現代ブルガリア語百科事典 (Енциклопедия на съвремения български език)』(2000)の334頁参照のこと。

差を経たあとで、関東地方の方言群をもとに「関東標準語」が成立し、それぞれの国家で規範のある公式言語として機能していることを想像されたらよいだろう⁷³。

ブルガリア語とマケドニア語は、標準語の規範においては、次のような違いがある。しかし、それはマケドニア語の標準語にある特徴が、ブルガリア領土内の方言連続体の中に必ずしも存在しない、またその逆というわけではない。その差異の一部の例として以下が挙げられる(表1)。

表1. ブルガリア標準語とマケドニア標準語の差異のいくつか⁷⁴

言語現象	ブルガリア標準語	マケドニア標準語
正書法的特徴	й (j), щ (ʃt), ъ (j あるいは軟音記号), ъ (ə), ю (ju), я (ja) を含む(ロシア語に近い)	ј (j), ѓ (ɟ), ѕ (dʒ), љ (lj), њ (ɲ), ќ (c), ц (dʒ)を含む(セルビア語に近い)
アクセントのパターン	移動(自由)アクセント македОнски「マケドニアの」	固定アクセント(最終音節から三音節目、二音節では二音節目) макеДонски「マケドニアの」
スラブ祖語の子音連続 *tj, *dj の反映形	щ (ʃt): нощ「夜」 жд (zd): межда「境」	ќ (c): ноќ「夜」 ѓ (ɟ): меѓа「境」
スラブ祖語の母音 *ъ の反映形	ъ (ə): сън「夢」	о (o): сон「夢」
スラブ祖語の鼻母音 *ǫ の反映形	ъ (ə): ръка「手」	а (a): рака「手」
スラブ祖語の母音 *ě の反映形	ě (æ): я または е вяра「信念」、бели「白い」	ě (æ): е вера「信念」、бели「白い」
be 動詞および have 動詞と分詞の結合による迂言法	なし	сум дојден「私は来た」 имама видено「私は見た」
後置冠詞の数とパターン	1 種類。-t- къща-та「その家」	3 種類。-v-, -t-, -n- куќа-ва「この家」、-та「その家」、-на「あの家」

⁷³ 方言連続体の中で一つの標準形が成立し定着すると、それが唯一の権威的で正しい形式とみなされ、それ以外は「間違い」、「非純粋」、「(標準語から劣るというニュアンスを帯びて)方言」など、非学術的で差別的なレッテルが貼られることは、あらゆる地域に見られる現象である。現代ブルガリア標準語の形成がマケドニア語のそれよりも半世紀以上早かったこともあり、ブルガリア人にとって唯一正しい言語形式は現代ブルガリア標準語だけであるという意識が潜在的にあるようにも考えられる。

⁷⁴ 括弧内の記号は国際音声記号(IPA)に基づくものである。

4. 相互理解度について

ブルガリア人がブルガリア語、マケドニア人がマケドニア語で話しても、概ね理解が可能であるとされる。なお、上記のビクター・フリードマンは、本論で言及した論文の中で、それでも常に 100%の相互理解ではないと指摘している。相互理解度が同一言語か別個の言語を分ける基準と考えられることもあるが、これは絶対ではない。スラブ圏で言うならば、チェコ人とスロバキア人はそれぞれ自身の言語を話すことで、ほぼ問題なく相互理解が可能である。また、発生的に異なるポーランド語(西スラブ語)とウクライナ語(東スラブ語)による相互理解度も、管見の限り、比較的高度である。これは主にスラブ祖語由来の共通語彙および言語接触に基づく語彙の借用に基づくものであると考えられる。しかしながら、今日においてチェコ語とスロバキア語が同一言語であるという主張はまかり通らないし、ポーランド語とウクライナ語が同一言語に属するという見解は、単に学術的事実に反する⁷⁵。

⁷⁵ なお、ロシア語、ベラルーシ語、ウクライナ語に関しても同じことが言えるが、ロシア語を全く知らないベラルーシ人やウクライナ人という設定が不自然であるため、相互理解性を考えるうえで必ずしも妥当な例ではない。